



近江の古鏡 II

「文化財教室シリーズ105」の「近江の古鏡出土地域一覧」でも明らかなように、近江における古鏡の出土は湖南が目立って多いようです。したがって、まず湖南から出土鏡の説明をしましょう。この湖南を、栗太・甲賀の両郡と野洲郡の2地域に分けることにします。甲賀郡を栗太郡と共に説明するのは、単に数のうえからの分類で、両郡が密接に結びつくという意味ではありません。

大津市大萱3丁目（旧瀬田町）にあった織部山古墳で、明治45年に三角縁四神四獣鏡が発見されました。直径23.1cmの大型鏡で、現在は東京国立博物館にあります(1)。伴出の遺物には刀剣破片、鉄斧等が伝えられています。鏡背の内区は乳で4分割されていますが、この乳の位置は一ヶ所ずれているようです。この分割された区画内に、所謂笠松形（旄一はたかざりとする意見が有力です）を挟んで二対の神像と獣像が描かれています。銘帯には時計廻りに次の銘文があります。

新作明竟 幽律三剛 配徳君子 清而且明
銅出徐州 師出洛陽 彫文刻鏤 皆作文章
取者大吉 宜子孫

この中に「銅は徐州に出で—淮河下流域の徐州産の銅でこの鏡が作られ、師は洛陽に出ず—鏡作りの工人は洛陽の人である」の句があり、この徐州や洛陽の表現が魏の鏡であることを示しているとされました。と言うのは、徐州は前漢、後漢時代は彭城と称されていたが、魏の時代に始めて徐州となったし、洛陽はもと洛陽・雒陽が併用されていたが、前漢末以来雒陽とだけ書くようになり、魏になって再び洛陽と書かれたと言うのです。そのほ

か、魏の次の晋はその祖が司馬師であり、この諱を避けて師の字は使わなかった。したがって鏡銘に師が使われているのは晋以前の魏の時代のものとされたのです。このように銘文からその鏡の製作に関するいろいろな資料を得ようとするのは早くから行なわれていました。本来、銘文はこの銘文の最後の句「これを持っている人は大変な吉運に恵まれ、その子孫は繁栄する」というような、その鏡の所持者を寿ぐ目出度い言葉を述べる人が多いのですが、鏡の研究では銘文の中のいろいろな文意からその由来を探ろうとする試みがあったようです。また同範鏡（同じ鑄型で作られた鏡）が多いことでも三角縁神獣鏡は有名です。この織部山古墳出土鏡も、京都府向日市北山古墳出土鏡、岡山市湯迫車塚古墳出土鏡が同範鏡のようです。なお、三角縁神獣鏡が中国で作られたのか、中国の呉の工人がわが国に渡って作ったのかという論争が現在盛んに行なわれていることは、前稿の総説で述べておきました。

草津市山寺町の北谷11号墳では、昭和35年の名神高速道路建設に伴う関連工事で仿製の方格規矩鏡が発見されました。これも直径が23.5cmの大型鏡です(2)。方格規矩鏡はTLV鏡とも言われていたように、鏡背の文様にT・L・V字のような模様のある鏡です。現在ではL・Vを曲尺やコンパス即ち規矩を表わすとして、規矩鏡の名称でよばれています。方格というのは、鈕をとりまく部分は円が普通ですが、これは正方形で囲まれているのでこの名があります。中国の鏡はLに当る部分がLの逆の「」になることが多く、それに対し

仿製鏡ではLになっているのが一番目につきやすい特徴です。方格と規矩の間には、中国の鏡では四神（青竜、白虎、朱雀、玄武）や禽獸類が描かれており、方格規矩四神鏡とよばれていますが、仿製鏡ではこの四神が大分崩れた図になることが多いようです。なお、北谷の鏡は縁の文様帯にも8個のL字形があります。この鏡背の文様については、鏡の円と中央の方格を「天円地方」とされた天地を表わすとし、T、L、Vや四神等についても中国の古代思想に基づいた解釈を下している学説もあります。北谷11号墳の副葬品としては、棺内に鍬形石3が、棺外に鍬形石2、鉄剣約28、鉄鏃8 その他の鉄製工具類がありました。

栗東町では安養寺を中心とした安養寺山麓に多くの古墳があり、この古墳群では多くの鏡が出土しています。発見の古いものでは、川辺の灰塚山頂に近い古墳から江戸時代の寛政年間に勾玉等と共に鏡が出土したとの記録がありますが、これがどのような鏡であるかは不明です。

名神高速道路の建設に伴い、昭和34年から翌35年にかけて数基の古墳が調査され、川辺下味古墳から2面、安養寺新開1号墳から3面、同山の上古墳から1面、同毛刈古墳から1面の鏡が発見されました。そのほか安養寺山麓では、昭和8年に大塚越古墳から2面の鏡が発見され、発見の経緯は不明ですが、名刹安養寺の近くの薬師谷から1面の鏡が発見されています。また、六地藏の岡山墓地にある古墳で、大正2年に2面の鏡が発見されました。なお、栗東町の佐々木大塚という古墳から1面の鏡が発見されたという記録がありますが、これは、鏡は勿論のこと古墳そのものについても不明です。このように安養寺山麓の古墳では江戸時代のものを含めて13面、もし佐々木大塚が正しければ14面の鏡が発見されています。

まず岡山古墳の2面は、三角縁三神三獸鏡

と盤竜鏡で、現在は付近の高野神社の所蔵となっています。三神三獸鏡は径22.1cmで、内区は6個の乳で6区画に分けられ、各区画内に1体ずつの神像と獸像が交互に描かれています。それをとりまいて獸文帯があり、ここに「日月天王」の銘を入れた方形を4個4等分の位置に入れています(3)。これと同範の鏡は、京都府向日市の物集女付近出土の伝承のあるもの、三重県嬉野町筒野古墳出土鏡、大分県宇佐市赤塚古墳出土鏡です。盤竜鏡は舶載鏡で、その径は11.1cmと神獸鏡に比べて小型です(4)。

安養寺の大塚越古墳で発見された2面は、現在多くの伴出遺物と共に京都大学の所蔵となっています。鏡の一は舶載の斜縁二神二獸鏡で、その径は14.2cmです(5)。内区は4個の乳で4分割され、侍者を伴った神仙と獸像が各区画内に描かれています。これをとりまく銘帯には、京都大学文学部の「考古学資料目録2」によれば

吾□□竟 □□三□ 競徳序道 配像萬彊
子孫番昌

の銘文があります。なお「滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要」では「吾作明竟 幽凍三箇」と欠字を判読しています。他は直径9.3cmの小型の仿製素文鏡です(6)。この大塚越古墳では、鏡のほかに勾玉12、管玉135、囊玉32、算盤玉形小玉64、小玉2100、琴柱型石製品1、鉄斧2、巴形銅器3、鉄刀短甲の破片多数が発見されました。

安養寺という地名の起源と考えられる名刹安養寺の付近で、仿製の四乳鏡が発見されました。これは発見の日時、位置、経緯等一切不明ですが、昭和20～30年頃に安養寺に近い裏山の崩壊した古墳の残土中に発見されたのではないかと思われます。一部が欠けていますが、径は11.2cmの鏡で、内区に4個の乳の存在は判明しますがそれ以外は不明で、これをとりまいて斜行櫛歯文帯と複線の波文帯が認められます(7)。伴出の遺物としては銅釧



1

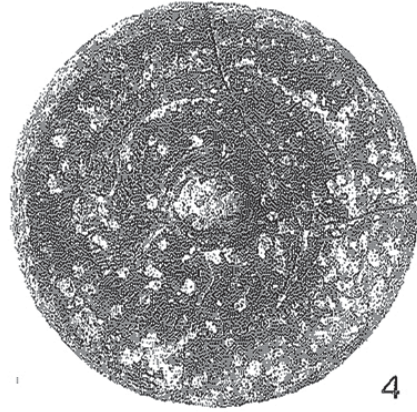


2

1. 大津織部山古墳
3. 栗東岡山古墳



3



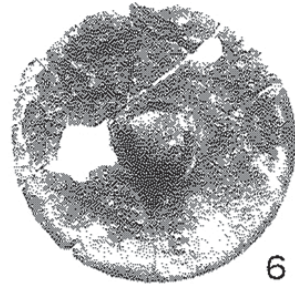
4

2. 草津北谷11号墳
7. 栗東薬師谷

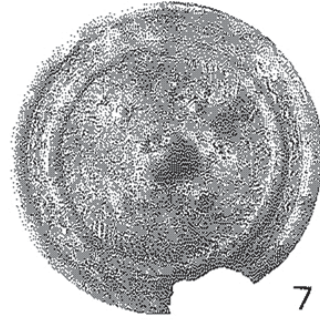
9. 栗東山の上古墳



5

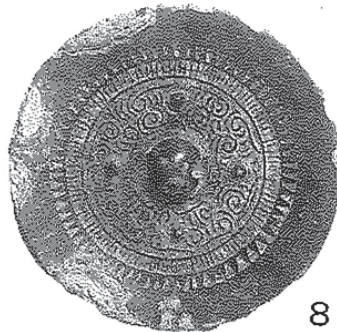


6



7

5. 栗東大塚越古墳
6. 栗東大塚越古墳
8. 栗東毛刈古墳



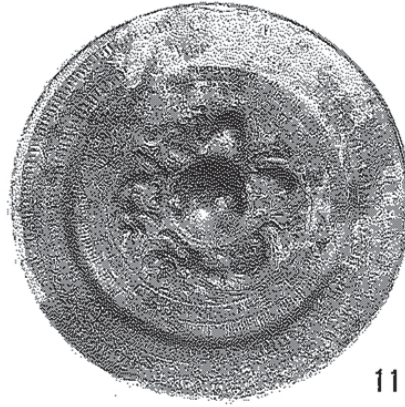
8



9



10



11

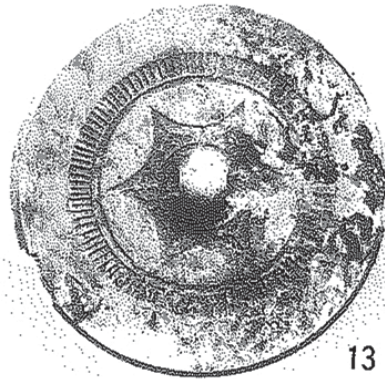
10.11.12. 栗東新開1号墳



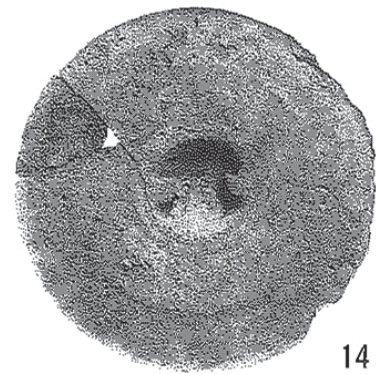
11部分



12

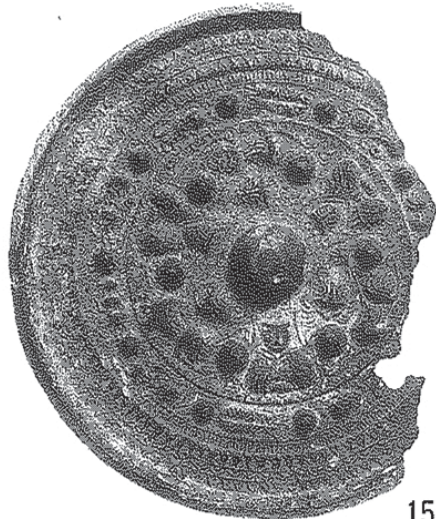


13

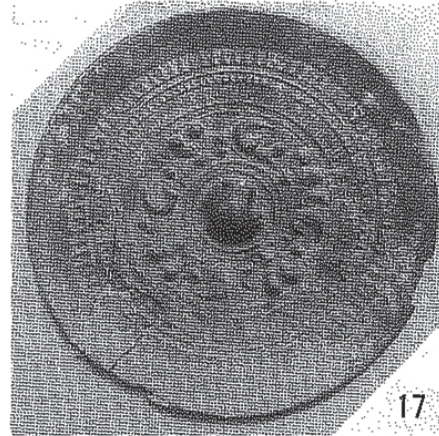


14

13. 14. 栗東下味古墳



15



17

17. 水口大路山
18. 水口塚の越古墳

1. 3~5. 7~12.
14. 15.

寿福滋氏写真

6. 京大文学部
考古学資料目録
写真

13. 滋賀県史跡調査
報告12 写真

17. 滋賀県史蹟名勝
天然記念物概要
写真

15. 栗東亀塚古墳



16

16. 栗東高野遺跡



18

が知られているだけです。この鏡と釧は現在京都国立博物館に保管されています。

名神高速道路は安養寺山の山麓を通過して、その東端に栗東インターチェンジを造っています。この安養寺山麓の建設工事に伴って数基の古墳から出土した鏡について、その概要を説明しましょう。

安養寺小字毛刈にある毛刈古墳は、墳丘がすっかり削平されて松茸山の客をする場所となっていました。古墳と知らずに行なったその削平工事の際、偶然古墳の基底部にある粘土面だけを辛ろうじて残していたようで、表土下20cmほどで古墳の基底面が現われました。その面で仿製の変形文鏡1面と勾玉2、管玉72、石釧破片1が発見されました。鏡はその径が8.9cmで、鏡背の文様は、原形を推測しかねるまでに簡略化してしまった文様の中に4個の乳がありました(8)。

小字山の上にも、毛刈古墳から考えてあるいは古墳ではないかと思われる部分がありましたので、念のため調査をしたところ、これまた墳丘が殆んどなくなった古墳の中心部の基底が辛ろうじて残っているのが発見されました。ここに舶載の斜縁二神二獣鏡1面と鉄剣7、小玉4、石釧の小片1がありました。鏡は前述の大塚越古墳出土鏡とよく似ており、直径18.1cmと大塚越古墳出土鏡よりはやや大きいものです(9)。鏡背の内区には4個の乳で分割された区画内に、2神と2獣が描かれており、2神はそれぞれ侍者を伴っていました。それをとりまく銘帯には

吾作明鏡 幽凍三商 鏡徳序道 曾年益寿子

の銘文があります。「幽凍三商」の「幽」は「明鏡(鏡)」の明に対する幽と考えられ、凍は鍊で、三商は三つの金属即ち銅、錫、鉛を表わすと思われまゝです。前述の大津市織部山古墳出土鏡の「三剛」も同じく銅、錫、鉛を意味するようです。この銘文は「子」で切れていますが、当然「子孫番昌」か何かそのよう

な言葉が続くべきでしょう。

次に新開1号墳も建設作業中に埴輪片が発見され古墳の存在が推測されたので調査が行なわれたものです。墳丘内に南北に2棺が並列して発見されました。南棺には非常に多くの副葬品が埋納されており、それが棺内と棺側に置かれていました。棺内には鏡のほかには櫛1、管玉5、小玉1866、鉄刀5、鉄剣7、鉄矛1、鉄鏃73、鉄製工具5、衝角付冑1、肩庇付冑4、短甲4、頸甲2、鉄製の籠手と臑当が各1対、金銅鍔板鉸具5その他が、棺側には鉄剣2、鉄矛3、鉄鏃7、盾3、馬具として金銅透彫鏡板付鉄轡1、鞍前後輪、輪鏡2組、馬鐙3、環鈴2、辻金具鉸具等がありました。鏡は仿製の画像鏡で、径19.5cmと比較的大型の鏡です(10)。内区は4個の乳で分割された中に神像と獣像が画かれています。画像鏡というのは、内区の表現が後漢の頃の画像石の表現によく似ているところからこの名が由来しているものです。その主題は中国の故事に則って描かれているものが多いようです。北棺には南棺ほどの副葬品は無く、棺内には勾玉3、管玉21、小玉820、鉄刀3、鉄剣2等と共に2面の仿製鏡があり、棺側には櫛1、有孔円板1、鉄刀1がありました。鏡の一はその径13.8cmの盤竜鏡です(11)。あるいは竜虎鏡とすべきかもしれませんが、獣形は比較的しっかり描かれています。ところがこの鏡には銘帯がありますが、ここに書かれたものは文字に似て文字にはなっていません。所謂偽銘帯です。写真でその一部を拡大して示しておきました。他は仿製五獣鏡で、その径は8.3cmです(12)。これは5乳の間に極めて簡略化された獣形が描かれています。

川辺の下味古墳も、この安養寺山麓に連なる松茸山の客の場としていたもので、ここには小さな建物がありました。ちょうど古墳の頂部を利用していたことになります。この古墳は、それぞれ副棺を伴った2棺が並列しており、各棺には1面ずつの鏡が埋納されてい

ました。東棺は仿製の内行花文鏡で、その径は9.3 cmのものです(13)。内行花文鏡というのは、その内区の文様として連弧状の花文が鈕に向って内行している図が描かれているところから名付けられており、中国の後漢代の鏡です。しかし、仿製の内行花文鏡は時代が降って多く作られています。この棺の伴出遺物としては鉄剣4、鉄製工具類6、勾玉2、管玉18、石釧1等があります。西棺には仿製の櫛齒文鏡があり、その径は6.9 cmと小型のものです(14)。鏡背には鈕をとりまく重圈と櫛齒文帯がありますが、その間には文様が全然描かれておらず素文のようです。全体に粗質で風化がひどいものです。伴出遺物としては鉄剣1、鉄刀1、鉄製工具3、石釧1、勾玉4、管玉63、小玉110、棗玉1、櫛1等があります。

安養寺山麓を離れた平野部では、出庭の新幹線の北側守山市に近い所の亀塚古墳から、明治44年に仿製の三角縁三神三獸鏡が出土しました。大きさは径21.6 cmです(15)。これは現在京都国立博物館に保管されています。一部が欠失していますが、内区は6個の乳で6分割された各区画内に、神像と獸像が交互に描かれ、その外側には10個の乳で区画されたと思われる（欠失のため現在は8個が認められますが、さらに2個の乳が存在することは確実と思われます）獸文帯があります。この鏡は同範鏡が非常に多く、現在9面が判明しており、同範鏡としては最も数の多いものです。しかも、文様面に残る範のきず等の比較により、その鑄造の順序も推測され、この9面のほかになお同範鏡が存在する可能性も指摘されています。同範鏡としては岐阜県御嵩町野中古墳出土鏡、大阪府茨木市紫金山古墳出土鏡、山口県山陽町長光寺山古墳出土鏡2面、大分県宇佐市免ヶ平古墳出土鏡、それに伊勢出土、奈良県出土と伝えられるもの及び出土地不明のもの各1面です。なお、この鏡の伴出遺物としては刀身1、土器破片数個が

伝えられています。

高野では小型仿製櫛齒文鏡が1面発見されました。径7.1 cmで、鏡背の文様のうち、斜行する櫛齒文帯はわかりませんが、その他はよくわかりません(16)。これは古墳の副葬品として出土したものではありません。昭和59年に行なわれた高野遺跡の調査の際発見されたものです。この遺跡は古墳時代中、後期の集落跡と古代末期～中世初頭の集落跡が検出された遺跡で、この鏡は古墳時代の住居跡出土の小型仿製鏡と見るべきです。最近このような小型鏡が古墳以外の住居跡で発見される例がふえてきました。

野洲川下流域の野洲、栗太の両郡は古鏡出土が非常に多い地域ですが、野洲川中流域の甲賀郡ではあまり出土例がありません。水口町で2面の鏡が発見されただけです。その一は、昭和10年に高山の大路山で発見されたものですが、この鏡は現在所在不明です。しかし、昭和11年刊行の「滋賀県史蹟名勝天然紀念物概要」に収録されているのでその大要を知ることができます。同書によれば仿製の四獸鏡とされていますが、同書の写真を見ると4個の乳で4分割された各区画内に、神仙と獸形の簡略化されたものが並んでいるようにも見られます。勿論実物で精査していないので確言はできません。大きさは径10.9 cm（原文径3寸6分）のものです(17)。同時に勾玉管玉小玉や鉄刀剣の残欠等が出土しているようです。

泉の塚の越古墳からは昭和36年工事中に玉類武器武具の残欠とともに仿製の内行花文鏡が1面出土しましたが、現在はその部分が復原されて、水口町教育委員会が展示しています。大きさは直径13 cmです(18)。写真は欠失部分を復原したものです。

（西田 弘氏 提供）